

器楽履修者のピアノ演奏に対する自己効力感の傾向に関する研究

— 自己調整学習の視点から —

平野 智美

A study for tendency of the self-efficacy of piano learning students — from a viewpoint of the self-regulated learning —

Tomomi HIRANO

Abstract

The purpose of this study is to examine the factors affecting the self-efficacy which is the key of autonomous learning, and consider how to teach playing the piano from the view point of the self-regulated learning. I implemented the questionnaire method and the free description type questionnaire. As a result of analysis, I could not find correlations between five motivations which are established by the author (“credit earning”, “future”, “willingness”, “friends”, “desire”) and the self-efficacy of playing the piano. On the other hand, I find that students performing their “learning plans” tend to be higher in consciousness on the self-efficacy of playing the piano.

キーワード 音楽教育、学習意欲、自己調整学習、自己効力感、自律的な学び

1. はじめに

ピアノ演奏技術の習得には、自律的に学び、練習することが欠かせない。主体的に学習に取り組む為には、認知、情動、行動をコントロールすることが必要となる。日本の学校教育においては、1983年に中央教育審議会にて提出された審議経過報告で「自己教育力」の育成を掲げて以来、「生きる力」の知的側面である「自ら学ぶ力」の大切さが指摘されている¹。欧米では1990年代後半から認知心理学の知見を組み入れた実証的検討が進められており、その中で中心となっているのが、「自己調整学習 (self-regulated learning)」の概念である²。

自己調整学習について、伊藤 (2010) は「学習者がメタ認知、動機づけ、行動において自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義をしている³。また、この研究領域の代表的な研究者の Zimmerman (1989) は、自己調整学習の望ましい進み方を「予見の段階」「遂行のコントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階で

構成される循環的なプロセスとして考えている⁴。

「予見の段階」は、目標設定や方略の計画、成し遂げることへの自己効力感や課題への興味、「遂行コントロールの段階」では、遂行が上手くなされるように集中するなどの注意の焦点化や自己モニタリング、「自己省察の段階」は、自己評価や自己反省である。そしてこの「予見の段階」「遂行の段階」「自己省察の段階」という自己調整のすべての段階において、学習に関する自己効力感が影響力を持っているということがこれまでの研究 (Schunk and Ertmer, 2000 ; Zimmerman, 2002a, 2002b) で明らかにされている⁵。

自己効力感 (Self-Efficacy) とは、社会的学習理論を体系化した Bandura (1977) によって提唱された概念である⁶。自己効力感には、課題や場面に特異的なかたちで行動に影響を及ぼす自己効力感 (Task-Specific Self-Efficacy) と、一般化した日常場面における行動に影響する特性的自己効力感 (Generalized Self-Efficacy) の2つ

の水準があることが知られており、バンデューラはこの2つの水準の自己効力感が、人間の行動に影響を及ぼしている」と指摘した⁷。

平野(2018)は、特性的自己効力感とピアノ学習に対する自己効力感の関係性や、ピアノ経験年数の違いによるピアノ学習に対する自己効力感について分析した。その結果、個人が持ち合わせている特性的自己効力感が、個別の課題であるピアノ学習に対しても強い影響を与えていることが、明らかになった。またピアノ経験年数5年を分岐点に、授業で出される課題に対して練習すれば弾くことができるという高い自信を持っていること、さらに難しいと思える作品にも挑戦する意欲が高いことが認められた⁸。しかし同時に、ピアノ初心者で入学する学生が年々増加傾向にあるなかで、ピアノ経験年数に関係なく自己効力感を高めるために、何ができるのかという課題も浮き彫りになった。

自己効力感には多数の要因が影響を与えており、主なものに、成功する体験、モデリング、言語的説得、生理学的状態などが挙げられている⁹。一方、自己調整学習と関連する動機づけ要因として、自己効力感や内発的価値、達成動機など多くのものが取り上げられている¹⁰。

このような背景を踏まえ、本論文では自己調整学習の視点から、自律的な学びの鍵となるピアノ演奏に対する自己効力感の傾向を研究すると同時に、自律的な学びを促すための実技指導のあり方について考察する。

2. 研究の目的

自己調整学習の視点から実技レッスンのあり方を考察するため、ピアノ学習に対する質問紙法によるアンケートと自由記述によるアンケートを行った。自由記述では、ピアノ学習に対する動機づけを明らかにすることを目的とした。質問紙法では、日々の練習時間や達成感などのピアノ学習に対する質問について回答を求めた。それぞれの研究の結果を示した後に、2種類のアンケートの項目間の相関係数を確認することで、どのような要因がピアノ演奏に対する自己効力感へ影響を与えるのかを明らかにする。

3. 方法

(1) 調査対象者及び調査方法

千葉経済大学短期大学部こども学科「器楽I」「器楽II」履修者のうち、筆者が担当した1～2年の学生に、質問紙法と自由記述によるアンケートを実施した。実施時期は、前期試験終了後の2019年7月下旬と、2019年11月上旬の2回である。対象者に調査を実施するに際し、調査への協力は自由意志によるものであり、研究に参加しないことで一切の不利益を生じることがないことを口頭にて伝えた。さらに、調査参加の同意書への署名を得られた者のみ対象とし、2つのアンケートに回答があった48名(1年生. 女性33名、2年生. 女性15名)を調査対象者とした。

(2) アンケートの構成

質問紙法では、ピアノ学習に対する7つの質問に対して回答を求めた。ピアノの経験年数に対しては「1年未満」「1年～5年未満」「5年～10年未満」「10年以上」の4件法、1日の練習時間については「ほとんどしない」「30分未満」「30分以上、1時間未満」「1時間以上、1時間30分未満」「1時間30分以上」の5件法、1週間の練習日数については「ほとんどしない」「1～2日間」「3～4日間」「5～6日間」「毎日」の5件法、それ以外の質問に対しては「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらとも言えない」「まあまあそう思う」「そう思う」の5件法で回答を求めた。

自由記述では、「ピアノを練習していて、難しい部分に遭遇しても練習を続けようと思うときに、何があなたをそうさせていますか。具体的に書いてください。」と記載し、回答を求めた。

4. 結果

(1) 質問紙法によるピアノ学習に関するアンケート結果

前期15回目の授業時に質問紙を配布し、調査の概要と回答方法を説明した。また、成績に影響しないことを口頭および書面で説明した。質問内容は以下の通りである。

問1. ピアノ経験年数をお教えください。

- 問2. 授業以外に1日どのくらい練習していますか。
 問3. 週何日くらい練習していますか。
 問4. 入学当初と比較すると、進歩を感じる。
 問5. 卒業する頃には、現場で通用するピアノ技術が身についていると思う。
 問6. 知らない作品(課題)でも練習すれば弾けるようになる自信がある。
 問7. 自分が立てた学習計画を実行している。

なお、授業1回目の終了時から前期最終回の15回目まで、毎日の練習時間を記録させ、練習方法や練習計画、目標について個別にフィードバックを行っていたが、問2と問3は日々の練習時間に関して改めて質問したものである。問4は入学時からの進歩や達成感について、問5はピアノ技術の展望、教育への信頼、問6はピアノ演奏に対する自己効力感、問7は学習計画遂行に対する振り返りを促す質問として設定した。問1から問7についての平均と標準偏差は表1の通りである。

表1 質問紙法によるアンケートの平均と標準偏差

質問	1	2	3	4	5	6	7
平均	2.125	2.542	2.979	4.063	3.813	3.667	3.083
標準偏差	1.141	0.713	0.911	0.909	1.003	0.907	1.007

(n=48)

① ピアノ経験年数について

「1年未満」19名、「1年～5年未満」13名、「5年～10年未満」7名、「10年以上」9名であった(図1)。最も多い回答は「1年未満」の19名(40%)、次に多かったのが「1年～5年未満」の13名(27%)であった。2年生は必然的に1年未満0名となる為、ピアノ初心者はい年生33名のうち19名であった。

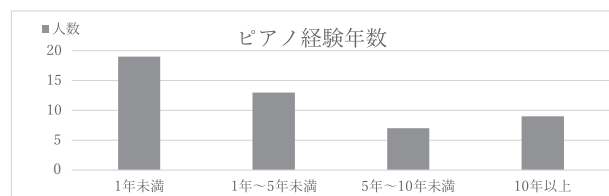


図1 ピアノ経験年数の比較

② 1日の練習時間について

「ほとんどしない」3名、「3分未満」19名、「30分以上、1時間未満」23名、「1時間以上、1時間30分未満」3名、「1時間30分以上」0名であった(図2)。最も多い回答は「30分以上、1時間未満」の23名(48%)、次に多かったのが「30分未満」の19名(40%)であった。

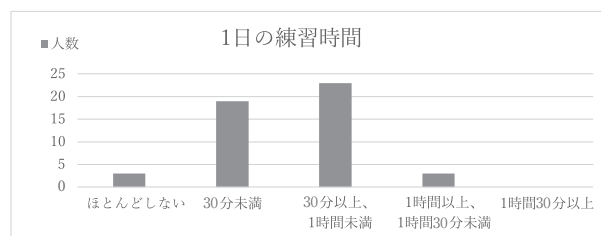


図2 1日の練習時間の比較

③ 1週間の練習日数について

「ほとんどしない」1名、「1～2日間」13名、「3～4日間」24名、「5～6日間」6名、「毎日」4名であった(図3)。最も多い回答は「3～4日間」の24名(50%)次に多かったのが「1～2日間」の13名(27%)であった。

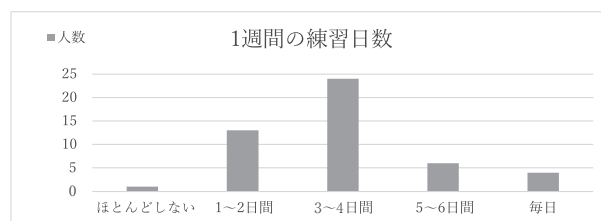


図3 1週間における練習日数の比較

④ 入学時との比較によるピアノ演奏技術の進歩について

「そう思わない」1名、「あまりそう思わない」3名、「どちらとも言えない」3名、「まあまあそう思う」26名、「そう思う」15名であった(図4)。最も多い回答は「まあまあそう思う」26名(54%)、次に多かったのが「そう思う」15名(31%)であった。

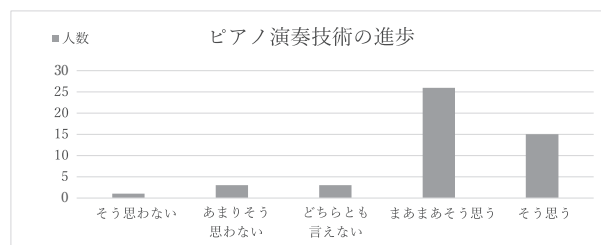


図4 ピアノ演奏技術の進歩の比較

⑤ ピアノ演奏技術の展望について

「そう思わない」1名、「あまりそう思わない」4名、「どちらとも言えない」11名、「まあまあそう思う」19名、「そう思う」13名であった(図5)。最も多い回答は「まあまあそう思う」19名(40%)、次に多かったのが「そう思う」13名(27%)であった。

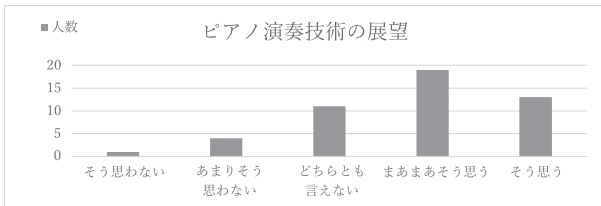


図5 ピアノ演奏技術の展望の比較

⑥ ピアノ演奏に対する自己効力感の傾向

「そう思わない」1名、「あまりそう思わない」4名、「どちらとも言えない」12名、「まあまあそう思う」24名、「そう思う」7名であった(図6)。最も多い回答は「まあまあそう思う」24名(50%)、次に多かったのが「どちらとも言えない」12名(25%)であった。

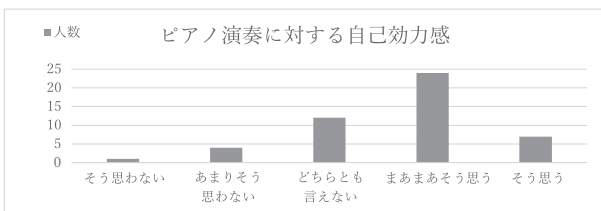


図6 ピアノ演奏に対する自己効力感の傾向の比較

⑦ 学習計画の実行について

「そう思わない」1名、「あまりそう思わない」14名、「どちらとも言えない」18名、「まあまあそう思う」10名、「そう思う」5名であった(図7)。最も多い回答は「どちらとも言えない」18名(38%)、次に多かったのが「あまりそう思わない」14名(29%)であった。ピアノ演奏技術に対する進歩、展望、自己効力感と比較すると、学習計画実行は最も低い平均値となった。

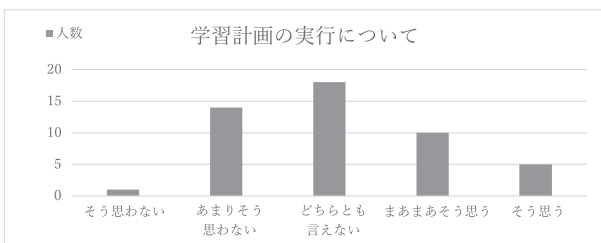


図7 学習計画実行の比較

(2) 自由記述による動機づけに関するアンケート結果

11月上旬に自由記述用のアンケート用紙を配布した。字数、形式は問わないこと、成績に影響しないことを口頭で説明した。

自由記述の回答から、類似する内容ごとにカテゴリー化し、「単位取得」「将来の展望」「意欲」「友人」「願望」の5つに分類した。また以下のような基準に基づき、配点を行った。

「単位」は学習自体から得られる報酬に関連すると判断できる記述が見られた場合に1点を加点した。「将来の展望」は仕事などに直接役に立つ学習や、将来に関する記述が見られた場合に1点を加点した。「意欲」は努力や挑戦しようとする意思の強さ、達成感などの記述が見られた場合に1点を加点した。「友人」は励ましあいなどの親和的傾向や切磋琢磨する競争志向など、友人の影響が見られた場合に1点を加点した。「願望」は興味や課題から得られる直接の楽しさや憧れに関連する記述が見られた場合に1点を加点した。1人の学生の回答に、複数の分野についての記述が見られた場合にはそれぞれに1点を加点し、1つの分野に対して複数の回答が見られた場合には1点のみの加点とした。このように自由記述を分類した結果が表2である。

単位取得では、「できるだけ上の単位が欲しいから」「単位を取得するため」など15名が単位に関連する記述をした。

将来の展望では、「まだ保育所か幼稚園か施設かは決めていないけれど、ピアノができるようになれば選択の幅が広がると思うからです」「将来の夢を叶えるために、ピアノが必要だから」など10名が将来に関連する記述をした。

意欲では、「1つの曲を完成させるという目標を達成したいから」「努力を大事にしたい」など41名が意欲に関連する記述をした。

友人では、「普段友達と“ピアノ何曲できた”と話し、みんなも頑張っていることを確認し練習しようという気持ちになります」「友人もピアノが初心者だから、その友人と一緒に頑張ろうと言っている」など12名が友人に

表2 動機づけについてのカテゴリズ結果

カテゴリー	自由記述の例	点数
単位取得	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ上の単位が欲しいから ・単位を取得するため 	15
将来の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所か幼稚園か施設かは決めていないけれど、ピアノができるようになれば選択の幅が広がると思うから ・将来の夢を叶えるために、ピアノが必要だから 	10
意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・1つの曲を完成させるという目標を達成したいから ・努力を大事にしたい 	41
友人	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と「ピアノ何曲できた」と話し、みんなも頑張っていることを確認し練習しようという気持ちになります ・友人もピアノが初心者だから、その友人と一緒に頑張ろうと言っている 	12
願望	<ul style="list-style-type: none"> ・弾けるようになったらすごく気分が良くなるので、もっと色々な曲に挑戦したいと思う ・綺麗に弾けたら素敵、お手本のような音が出たら嬉しい 	20

関連する記述をした。

願望では、「弾けるようになったらすごく気分が良くなるので、もっと色々な曲に挑戦したいと思う」「綺麗に弾けたら素敵、お手本のような音が出たら嬉しい」など20名が願望に関連する記述をした。

興味深いのは、「友人」と回答した13名中、8名がピアノ経験年数1年未満であったことであり、「願望」と回答したピアノ経験年数1年未満は、23名中3名であったことである。

また、「最初はやらなければならないということをやっていたけど、今は上手になりたいということが原動力」と、モチベーションの変化について記述をした学生も見られた。

(3) 2種類のアンケートの項目間の相関係数

2種類のアンケートの項目間で相関係数を計算した結果が表3である。最も強い正の相関が見られたのは、問5「卒業する頃には現場で通用するピアノ技術が身についていると思う」と問6「知らない作品（課題）でも、練習すれば弾けるようになる自信がある」で、相関係数は0.631であった。この結果について無相関検定を行ったところ、1%有意水準（ $P < 0.001$ ）となり帰無仮説は棄却された。

弱い正の相関関係がある項目は、問6と問7の相関係数0.334（ $P = 0.020$ ）が挙げられる。この結果から、「自分が立てた学習計画を実行している」学生は、ピアノ演奏に対する自己効力感が高い傾向にあることが明らかになった。

その他、相関係数0.3以上の項目は、問1と問5の間で0.374（ $P = 0.009$ ）、問1と問6の間で0.432（ $P = 0.002$ ）であった。つまりピアノ経験年数が高くなると自己効力感も高く、卒業する頃に現場で通用するピアノ技術も身につくと思っている傾向があることがわかる。

弱い負の相関関係がある項目は、問1と問2の相関係数-0.372（ $P = 0.009$ ）であった。この結果から、ピアノの経験年数が少ない学生ほど、1日の練習時間が長い傾向にあることが示された。

またピアノ経験年数と「願望」との相関係数は0.468（ $P = 0.001$ ）、ピアノ経験年数と「友人」は-0.362（ $P = 0.011$ ）であった。このことからピアノ経験年数が長くなるにつれて表現への欲求が高まり、初心者であるほどに友人の影響を強く受けることが明らかになった。

表3 2種類のアンケート結果による相関係数

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7
問1	1.000	-0.372**	-0.223	-0.049	0.374**	0.432**	-0.009
問2	-0.372**	1.000	0.280	0.078	-0.212	-0.110	0.262
問3	-0.223	0.280*	1.000	0.104	0.089	-0.034	0.234
問4	-0.049	0.078	0.104	1.000	0.013	0.155	0.250
問5	0.374**	-0.212	0.089	0.013	1.000	0.631**	0.205
問6	0.432**	-0.110	-0.034	0.155	0.631**	1.000	0.334**
問7	-0.009	0.262*	0.234	0.250	0.205	0.334*	1.000
単位取得	-0.114	0.042	0.088	0.203	0.082	0.200	0.124
将来の展望	-0.109	0.042	0.012	0.135	0.122	-0.095	0.009
意欲	0.046	0.150	0.187	0.094	-0.019	0.110	0.094
友人	-0.362*	0.136	0.227	0.120	-0.182	-0.214	0.080
願望	0.468**	-0.110	-0.027	-0.247	0.074	0.031	-0.028

**P<.01、*P<.05

5. 結論と今後の展望

本研究は、ピアノ演奏に対する自己効力感に影響を与える要因を分析し、自律的な学びを促すための実技指導のあり方について考察することを目的とした。器楽履修者に対して質問紙法と自由記述によるアンケートを用いた調査を行い、2種類のアンケートの項目間の相関係数を確認することで、どのような要因がピアノ演奏に対する自己効力感へ影響を与えるのかを検討した。

その結果、自分が立てた学習計画を実行している学生は、ピアノ演奏に対する自己効力感が高い傾向にあることが明らかになった。

一方、筆者が設定した5つの動機づけ「単位取得」「将来の展望」「意欲」「友人」「願望」とピアノ演奏に対する自己効力感との相関関係は見られなかった。このことから、動機づけに刺激を与えるよりも、学生自身で学習計画を遂行できるように導くことの方が、学生のピアノ演奏に対する自己効力感に与える影響が大きいことが確認された。

筆者は、前期15回の授業時に毎回、1週間の練習時間を記入してもらった情報を基に練習方法の提案や練習時間の確保の仕方などを伝えるなど、必要に応じて学生の

練習方略を再検討するよう試みていたものの、自律的な学びを遂行できるまでに至らない学生も見受けられた。今回の結果と自己調整学習の理論を踏まえると、学習方略の獲得や、動機づけだけでは自己効力感を高めることや自律した学びを促すことは難しいことが示唆された。自己調整学習の望ましい進み方である「予見の段階」「遂行のコントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階が機能するためには、学生自身で自己評価できる仕組みを構築することが有効であると考えられる。

ピアノが弾けるようになるには、様々な要素を理解する必要がある。授業時に教師側から指摘するだけでなく、どの要素に対して理解できているのか、理解できていないのかを学生自身で自己省察できるようなシートを作成し、教師と学生の共同で振り返りを行うことで、学びの3段階プロセスがうまく循環するように導いていくような授業を行うことが今後の課題である。

また、初心者であるほど「友人」の影響を受けやすい傾向にあることから、初心者の割合が高いクラスでは、グループ学習の割合を増やすことも検討課題としてあげられる。これまで筆者の授業内では、演奏に対して他の学生からの意見、意見を受けての感想といったグループ

学習を行っており、クラス内の友人の演奏に刺激を受けたり、感想に励まされたりと一定の効果はあったと思われる。これに加え、今後は学習意欲に関わる情緒面的な方略についても含め、効果的な個人レッスンとグループレッスンのあり方について検討する必要がある。

本研究では、問6の設問によってピアノ演奏に対する自己効力感を測ることとしたが、今後はピアノ演奏に対する自己効力感の尺度開発などが求められる。また研究の課題としては、調査対象者が限定的であり、本研究で得られた知見を一般化するためには、サンプル数を増やし精緻化した分析をする必要がある。

謝辞

本調査を行うにあたりご協力をいただいた学生に、深く感謝申し上げます。

参考文献

1. 兼重宗和 (1991). 自己教育力について 徳山大学論叢, 35, pp.93-106.
2. 伊藤崇達 (2008). 自ら学ぶ力を育てる方略 - 自己調整学習の観点から - BERD, No.13.
3. 神藤貴昭「自己調整学習」論の可能性 - 動機づけと個人差にかかわる課題に焦点を当てて - 立命館教職教育研究 4号 pp.23-32.
4. 藤田正・富田翔子 (2012). 自己調整学習に及ぼす学習動機及び学習方略についての認知の影響 教育実践開発研究センター研究紀要, 21, PP. 81-87.
5. デイル・H シャンク, バリー・J・ジーママン (2009). 自己調整学習と動機づけ, 北大路書房, P98.
6. Bandura, A (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, Psychological Review, 84, pp.191-215.
7. 坂野雄二・前田基成 (2002) 『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』北大路書房, pp.47-48.
8. 平野智美 (2018). ピアノ学習者の学習過程における自己効力感の醸成に関する研究 千葉経済大学短期大学部研究紀要, 14, PP. 63-72.
9. アルバート・バンデューラ (1997) 『激動社会の中の自己効力』(本明寛, 野口京子訳) 金子書房, pp.3-6.
10. 藤田正・富田翔子 (2012). 自己調整学習に及ぼす学習動機及び学習方略についての認知の影響 教育実践開発研究センター研究紀要, 21, PP. 81-87.